器楽合奏

宮崎節二

器楽とは声楽に対してある言葉であり、楽器によって演奏されるものである。また合奏とは、楽器による演奏形態であるから、器楽合奏とわざわざ重複するような言葉は、おかしいのだが、今日では学校音楽（主に小、中、高等学校）における合奏のことを、器楽合奏と称している。ここでは学校音楽にみる器楽合奏、およびその指導方法、また合奏の本質について書いてみたいと思う。

1．音楽時間

合奏するには楽器の制約は何もない。とにかく楽器と称される物が二つ以上あると、合奏はできるのである。このように書くと非常に簡単そうに思えるが、個々の楽器を充分習得した上でないと、合奏にはならないのである。この充分習得する、と言う所に問題が生じてくる。それは学校の音楽といった、かぎられた時間、また多人数の中で、どの程度個人の技術指導が、出来るかと言う点である。私も実際に、小、中、高等学校と教えてきたが、なかなか大変で個人指導となると、不可能にちかいのである。では、どうやって指導すればよいか、と言うことになるが、「合奏する」と言うことに重点をおいて、比較的簡単にひける楽器をやらすことである。そして個人の技術的な負担を、出来るだけ少なくして、まわりの楽器に充分気をつかって演奏できるようにするのが、合奏の勉強をするのに大切なことである。まわりに充分気をつかえると、このように表現したが、そこには技術が未熟だと、テンポが悪いとかの問題もあるが、これが合奏の基本であり、重要な点と考える。

音楽とは、時間と言う動かしがたい空間の中に約束が出来ているのであるから、個々に充分な正確さを持ちえるなら、まわりに気を使わなくても合奏は、合うのである。しかし、音楽には、そのような時計のように正確な時間ですべて解決するはずがないのである。まったく矛盾しているようなことを書いたが、音楽の正確な時間とは、そのような物である。このような時間を、私は、音楽時間と言っている。

さて、この音楽時間なるものを合わせるのは、時計の針を合わせるようなわけにはいかない。曲の解釈の仕方、またはその人、その人の技術などのちがいによっても、なかなか合わないのである。そこで少人数の合奏ではリーダー格になる人が、多人数の合奏には指揮者が必要になってくるのである。指揮者は、合奏をうまく合わす為に、物理的な運動の応用で、自分の音楽時間になるよう、相手を統率していくのである。もちろんそれだけではないのであるが、メカニックの面から考えるとまったくその通りなのである。物理的な運動とは、どういうことであるかと言うと、われわれ人間には身体を使う時、ある種の予測のようなものが出来るのである。これはパントマイムに見るような予測とはちがって、

すべての動作をしなくても、次はそうなるであろうと言う予測である。たとえばスポーツによく見られる物で、バドミントン、バレー、野球などで、相手から、投げたり、打ったりした球の落下点を予測し、補獲できるのである。『そこに来るであろう』この予測してくれるものにもとづいて指揮者は、指揮するのである。ゆえに指揮者がえがく、抛物線の落下点はまさに自然の法則そのものでなければいけない。身体に力が入って無理な運動になってはいけないし、指揮者自身も、自然な動きが出来るように、勉強しなくてはいけない。

2．音楽音

音になってくると、音楽はいちだんとむずかしくなるし、レベルも高くなってくる。まずなんと言っても最初に問題になるものは、音程を作らなければいけない楽器である。音程は、私が言っている音楽音に直接関係はないが、その前の段階でぬかすわけにはいかない問題である。絶対音的な正しい音程を身につけさせ、それから合奏の音程を勉強させなくてはいけない。合奏の音程と絶対音的な音程と、音程にもいろいろあるように書いたが、ピアノ、木琴、アコーディオンなどの平均律の楽器と、バイオリンを始めとする弦楽器、および管楽器のような平均律でない楽器がある。後者の楽器は、音程を作らなければいけない楽器である。合奏する場合は、これらの楽器が一緒にするわけだから、そこに、合奏の音程が生まれてくるわけである。ピアノでひく〝ド〟の音は〝ド〟の音そのものである。しかし、バイオリンでひく〝ド〟の音は、〝ド〟の音にした〝ド〟の音なのである。高めの〝ド〟低目の〝ド〟がありえるわけである。それらをよく聞き合わせて、良い合奏音になるようにしなければいけない。

今日、学校で使われている楽器で良い音楽音を作ろうとすることは、非常に大変なことであるし、楽器によっては、その能力の限界があるものも多いのである。どんな楽器でも、大変な訓練をしなくては、音楽音になってこないが、前記の音程の問題もからんで、器楽合奏の大きな問題点であると思う。私は、ある所でハーモニカの独奏を聞いたことがあるが、非常によく練習してあり、バイオリンの音かなあと、一瞬耳をうたがった音もあり、私がそれまでもっていたハーモニカ、ピアニカ、アコーディオンなどの楽器では満足な合奏はできないと言う考えがもろくもくずれてしまった記憶がある。楽器の持っている能力の浅い物は、たやすく入っていけるが、人に感動を与えるまでには、相当の努力がいる。こんな感じも、もったのである。音楽音は、技術をみがけばみがくほど、できてくる音（私はよくピーンとはりつめた音と言う）と、それらを使った音の色、いわゆる音色、これらを集合して良い合奏音が、出来てくるのである。独奏などよりいろんな特性をもった楽器があるので、たくさんの音色が作れるが、それらをまとめるのも大変なのである。コンチェルトをやる時、ピアノコンチェルト、バイオリンコンチェルトと、ソロ楽器がちがうと、オーケストラの音も、それらの楽器にとけこんでいくような音色にしなくてはいけないし、ソロ楽器も、いろんな音色が欲求されるのである。このように音となると理屈ではなかなか明解にできるものでないので、練習の時人間の感覚的なものと合わせて、技術をみがいていかなければいけない。

3．音楽感情

音楽の感情について書くには、今まで書いてきたリズムも、音色も、すべて関係してくるのである。音楽感情は、われわれ音楽を勉強する者が、一番ふれたがらない部分であり一番大切なことなのである。合奏におけるこの感情問題は、二種類考えられると思う。一つは、音楽を勉強していれば、その場所（たとえばエコーにするような所）は、通常こうするのだ、と言う場所があるわけである。また演奏する上での約束ごと、と言うか習慣になっている場所があるわけである。このような所の感情の統率は、勉強してくれば、自然に出来るものである。もう一つの感情は、音楽センスのような物まで含まれてくる感情で、その人の勉強の過程によってもちがってくるし、カルテットのような場合なら四人の意見の集合であったりする。オーケストラであれば、指揮者の感情なのである。合奏をする場合、この感情は、あまり指導する立場から教え込むようなものではないのだが、勉強の過程で、自分で経験したり、気がついたことを育てていく意味で、参考にさせる程度に教えればよいと思う。同じ所を二度くりかえす時は『はじめての道を歩く時と、二度目にあるく時にはどうだろう』と言った程度にである。このように音楽感情とは、音楽の勉強だけでなく、幅広い勉強をして育てていかなければいけないものである。

4．音楽人間

最後に合奏における人間関係について少し書いてみたいと思う。一番大切な人間関係は、指揮者と演奏者である。また先生と学生とも言えるのである。演奏者は、音楽の責任を指揮者にあづけるのであるから、そこには全幅の信頼関係が必要なのである。そこで指揮者たる者は、こまかい所では練習時間に遅れるようなことがあるとか、神聖な練習場を、けがするような行為(練習所でタバコを吸うなど)をしないとか、くだらないようだが、こんな所でも常にしっかりした態度をとっていないといけないのである。音楽の面でも、常に勉強していないと、その人の全部を知ってしまったら、だれもついていかなくなるだろう。また演奏者との人間関係も大切である。私の学生時代の経験だが、大学祭にモーツアルトの『レクエム』をやった時、オーボエとクラリネットの奏者が、祭り気分で少しお酒をのんで現われた。それを見た指揮者が涙をだしたものだから、他の人達みんなに、言葉で言えない『やってやろう』と言う気持をいだかせ、すばらしい演奏になった記憶がある。その指揮者は、ふだんから人望のあった人だったが、その時ほど、音楽には技術を超越した「何か」を感じたことはない。

合奏とは、音楽の持つ物すべて、またそれらから派生してくる諸問題を超越して、よい合奏、よい音楽にと、発展していくものである。

高松短期大学研究紀要

第　5　号

昭和50年3月1日印刷
昭和50年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
〒761－01　高松市春日町 960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158